

F-22 肉牛飼育農家の現状と生活

日本女大農研 好本照子

目的 米と魚を基調として日本の食生活文化は発展してきたのであるが、近年、米消費の減少と魚資源の枯渇、嗜好の変化に伴い、獣肉需要が増加してきた。なかでも、牛肉は高価格であるため消費量としては多いとはいえないが、牛肉への消費志向は強く、今後一層ふえるものと思われる。そこで、高い牛肉を生産している肉牛飼育農家の現状と生活を実態調査により捉え、問題の所在をさぐることを目的としている。

方法 資料調査および実態調査による。

調査対象地 三重県阿山郡伊賀町

結果 伊賀町の肉牛飼育は農協の預託によるものが大半を占めている。農協が素牛を購入する際の価格は25万円前後で、この牛を農家に預託し牛の生体が50kg以上になると売却する。売却価格は、波があり一定していないが58万円～60万円で、農家の利益は1頭につき7万～8万円である。肉牛生産量のうち最も多いのは濃厚飼料費であり、これが全面的に輸入に依存している現状をぬきにして肉牛生産は考えられず、生産農家の利益も飼料を如何に工夫して与え、飼料費を抑えようかにかかっているといえよう。このような状況の中で、かつての役牛飼育を基盤とする1～2頭の少数飼育が大半を占めていた肉牛飼育農家は経営的にはなりたえず、少数農家による多頭飼育へと転換して、両極に分化してきている。そこで、肉牛飼育農家における肉牛生産のしくみと生活、とくに、家計と主婦の生活時間について、3戸の農家の事例を検討することによって、いくつかの問題が明らかとなった。